

## 吃音の現象学にむけて～ナラティブ・アプローチが開く、どもる人たちの世界～ (1) どもる人たちのアイデンティティ

坂本英樹 (どもる子どもの親・教員・NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト)

### はじめに

#### 大阪吃音教室と出会うまで

2010年12月16日(金)、この日が私と大阪吃音教室との出会いの日である。きっかけはこの年の秋に遡る。当時、小学校5年生になる私の娘が突然、どもりだしたのである。いや、正確には幼少期からどもっていたのだが、私たち家族は音の繰り返しや引き伸ばしは一過性のものであると考え、どもりであるとは認識していなかった。実際、彼女の示すことばの状態はいつの間にか親の目からは見えなくなっていったのであるから。その娘が突然、小5の秋に「音読ができない、読めるのに読めない」と言って、毎晩のように実に悔しそうな顔をしてしくしくと泣き出したのである。「落ち着いて、リラックスして読んでごらん」というお決まりの対応をおろおろとしていた私たちが、「まるでことばが詰まっているようだ。これはもしかしたらどもりというものなのか？」と気づくにはしばらく時間がかかったように思う。

吃音について初めて読んだ本が、水町敏郎さんと伊藤伸二さん編著の「治すことにこだわらない、吃音とのつき合い方」(ナカニシヤ出版 2005年)である。この本によって、私は娘の「明日も音読であてられる。つまってみんなに笑われる」という訴えが、「予期不安」や「場面恐怖」、「吃語恐怖」という言葉で説明できること。私には思いに言葉が追いつかない、それでも伝えたい一糸懸命さとして微笑ましく映っていた、娘が自分の考えや気持ちを伝える時によく手を振りながら話す行為が「随伴運動」であったことなどが、ようやく理解できた。それは電話に出るのを嫌がるというような娘の成長過程のいろいろなエピソードが、吃音という視点を通してつながっていく経験だった。次に手にした伊藤さんの「どもる君へ いま伝えたいこと」(解放出版 2008年)は直接的には子どもに語りかける本でありながら、親にとっては子育て論、教員にとっては一級の教育哲学の書であろう。気がつけば集められる限りの伊藤さんの本が机上に並んでいた。

大阪吃音教室のホームページも見erようになった。いろいろな実践の雰囲気を知るためにも、一度くらいは覗いてみようと思っていたところ、当初の予定を変更して伊藤さんを担当に「認知行動療法」の例会を行うとの告知を見つけた。なぜか、「これは参加しろということなのだろう」との直観があり、当日は既に先約があったのだがそちらをキャンセルして参加したのが始まり。以来ほとんど皆勤に近い形で参加するようになったというのが、いささか長い私自身のプロフィールである。

#### 私自身のテーマ

セルフヘルプ・グループでは「同じ話を心の中で落ちるまで話せ」(1)という言葉があるという。私にとってはこの初参加の例会(2)で受けた印象、驚きがそれにあたる。年齢も職業、社会的経験も異なるであろう人々が会の始まりと同時に、テーマに即してさまざまな意見や考えを自らの経験に照らして開示していくのだ。「真剣でありながら、楽しく笑いの絶えないこの場は何なんだ。参加者のほぼ全員が発言しているが、この人たちは一体どこでこんなスキルを身に付けたのか。セルフヘルプ・グループとはこういう世界なのか」と思った。意見を述べる一人ひとりの存在が際立って見えた、それぞれがユニークな存在であることを主張していた。さまざまな声が響きあう空間、その風通しのよさとレベルの高さは、その場にいること自体が目的であるかのような研修を数多く経験している私には椅子から転げ落ちそうになるほどの衝撃だった。この雰囲気にすっかり魅了された私は娘のためというよりどもる子どもの親、一教員、そして一個人として学びたいと思った。

この日の印象は今でも私の中に息づいている。いつしか、吃音が示す意味というものを、大阪吃音教室の例会や吃音親子サマーキャンプの中で起こっていることを通して描きたい。吃音の何が現れてくるのか、また吃音を通してどんなテーマが立ち上がってくるのか。同時に大阪吃音教室という歴史のあるセルフヘルプ・グル

ープのもつ構造、価値を明らかにした。大阪吃音教室を通して、「吃音の現象学」(3)とでも呼べるものを形にしたいと思うようになった。

そのための方法論としては、日本吃音臨床研究会と NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトが最近注目する「ナラティブ・アプローチ」が有効であると考え、この論考はそれ以前の基礎作業として、「アイデンティティ」という視点から吃音のもつ世界に迫っていくことを目的としている。

## 吃音の課題とは何か

### アメリカの言語病理学から学ぶこと

半世紀以上も前に、ウェンデル・ジョンソンは「問題には、それを構成するメンバーがいる」(4)と指摘したうえで、吃音の課題を言語関係図というものによって明らかにした。吃音の課題を立方体の形、大きさとして表現するとして、X 軸を「話しことばの特徴」(5)、つまりどもる状態と捉え、Y 軸を「その特徴に対する聞き手の反応」(6)、そして Z 軸を「その特徴と聞き手の反応とに対する話し手の反応」(7)、つまり吃音に対する本人の認識、態度、意味づけと捉え、吃音の課題は「これらの要素のそれぞれの大きさと、関係と、相互反応いかんによって違った形をとるわけである」(8)と述べている。どもる状態、それ自身が吃音の課題ではなく、本人と親、教員、友だち、言語聴覚士などのメンバー間の相互作用、交流によって構成されたものが吃音の課題であると考えたのである。配偶者にさえわからないほどのどもり方でありながら深く悩んでいる、この立方体の大きな人がいる一方で、よくどもりながらも吃音を肯定的に捉えていることで明るく前向きに生きている、立方体の体積が小さな人がいるという事実をこの理論はよく説明することができる。

この本人の認識、態度である Z 軸をより掘り下げて考察したのが、ジョセフ・G・シーアンである。シーアンは吃音の課題を海面に浮かぶ氷山に喩え、海面上に浮かぶ部分をどもる状態とし、この海面上の部分より、「外からは見えない隠れた部分が、実は吃音の問題を考えるうえでは重要」(9)であると指摘した。海面下の部分の「どもることに対して、みっともないとか恐ろしいと感じる気持ち、何か悪いことをしたような気持ち」(10)こそが吃音の課題であると考えたのである。伊藤さんと大阪吃音教室ではこの吃音冰山説の海面下の部分を「どもるのは情けない」という「感情」、「どもりは劣ったものだ」という「思考」、「話すことから逃げたり、どもりを隠そう」とする「行動」、そして「緊張して話すとき硬直してしまうからだ、人とふれあうのを拒むからだ」(11)という「身体」の4点へと整理、発展させている。

このようなアイオワ学派と称されるアメリカ言語病理学の理論から今日、私たちが学ぶべきことは、吃音の課題は本人と他者とのやり取りによって、意味づけられ、方向づけられた本人の自己理解、つまり吃音を通して形成された感情、思考、行動等であるのだから、どもる本人にとってそれらは、アイデンティティ管理の問題として日常生活の中で実践、操作されているということである。

### 吃音を通してのアイデンティティ形成

学童期に吃音と向き合う早期自覚教育が大切であると、伊藤さんは繰り返し主張する。それはこの時期に吃音と向き合った経験が、心身の成長が著しく、友だちや先輩、教員との関係においても学童期とは質の異なる学校生活を送る思春期の子どもにとって、その思春期における吃音の課題を乗り越えるための免疫力、「苦難に耐えて自分自身を修復する力」(12)であるレジリエンス (resilience) を育むことになるからである。

思春期以降の私たちの課題にはアイデンティティの確立というものがある。多様な広がりを持つアイデンティティという概念をここでは、日々成長、変化していく中であって、「自分は何者であるか」について本人がもつ過去から現在、そして未来へとつながる連続した固有の意識と捉え、これは自分にとって意味のある他者の承認によって担保されるものであると理解することにしよう。

どもる人たちにとっては自他の違いに敏感となり、自分と人とを比べがちになる思春期以降にこの吃音を自分の人生にどう位置づけ、向き合っていくのかが、アイデンティティ確立の一つの要因となるだろう。伊藤さんの言う「ゼロの地点」に立ち、「どもるのは嫌だけれど、まあ、仕方ないか」というどもる事実を認め、つき合い方を模索できればよし。しかし、「どもるのは恥ずかしく、劣っている」と意識するならば、ここにアイデンティティ形成の危機、アイデンティティ・クライシスが生じることになる。

### 「逃げる、隠れる」という印象操作

社会学の石川准 (13) はアイデンティティ、存在証明の危機に対しては、その管理、操作の方法が4つあると説明する (14)。第一の方法は「印象操作」である。人に「知られると否定的に評価される負のアイデンティティを隠す」(15) という方法、ゴッフマン言うところの「パッシング」(passing) (16)、「成りすまし」という技術である。話さない限り、吃音は外見からはわからない現象である。吃音を望ましくない属性、徴であるスティグマと認識する人にとって話す場と機会を徹底して避ければ、どもりであることを人に知られることはない。友だちの輪の中にあっても口を開かない。授業中に当てられた時にはたとえ解答がわかっている、「わかりません」と答える。逆に「国語の本読みなどで当てられ、どもりながら読んだ時も、ふざけながら読み、まるでわざとどもっているように見せ」(17) るという演技性に満ちた高度な方法もある。友人の結婚式のスピーチもどもるのが嫌さに引き受けられない等々、どもることから「逃げる、隠れる」方法、経験はどもる人たちにとってはいくらでもあげることができるものだろう。

しかし、用意周到に印象操作をすればするほど、その失敗、破綻に対する不安、恐怖は高まり、吃音へのとらわれは増すことになる。身近な存在である配偶者や親、親友にさえ、隠すことに成功したがゆえに、大切な人に自己開示をしていないという点において悩んでいる人も多いのである。また、成りすましに成功した越境者は自らが所属する集団が、たとえばどもる人と接触した時にネガティブな言動を示したとしたら、どのような反応を示すのだろうか。何となくその場に同調するような反応や越境者は自らの属性が周囲にわかってしまうことを常に恐れているので、場合によってはより激しく、積極的にネガティブな反応を示すということもあるだろう。この自己欺瞞は本人の人間関係を貧しく、狭くするだけでなく、自尊感情をひどく損ない、自己嫌悪を深めていくことにつながっていくのである。

### 「補償努力」という「あり地獄」

第二の方法は「補償努力」、「名誉回復」と言われるものである。「社会的威信の高い集団への所属を達成するとか能力や資格を身に付けるというように、価値あるアイデンティティ項目を実際に獲得することで、無価値な自分を返上しよう」(18) という方法である。吃音を軽くする、治療・改善に取り組む、努力するという方法であるが、費用対効果を考える必要があるだろう。世界で最新の訓練・治療法 (19) とされるバリー・ギターの統合的アプローチの流暢性促進技法は「ゆっくり、そっと、やわらかく」というものだが、1903年の伊沢修二の楽石社を始めとする民間の吃音矯正所が試みた方法と本質において異なるものではない。仮にこうした訓練・治療に効果があったとして、どれだけの時間と費用をかければ、満足できるのだろうか。自分のどもる状態をコントロールできればできるほど、「次にどもったらどうしよう、どもれない」という吃音恐怖にどんどん縛られ、訓練・治療にのめりこむというサイクルに絡め取られてしまうのではないか。大阪吃音教室に初参加する中年男性に多く見られる、「今まで自分なりに何とかコントロールしてきたのだが、職場での役職があがり、挨拶や司会の機会が増えるので不安になった。何とかしたいと思った」という初参加の動機がそうしたサイクルを証明している。どもらずに話そうとするから、話せないのであって、どもりながら話せば司会や挨拶もできるはずなのだが、補償努力に取り付かれてしまうこうした発想を持つことができなくなってしまうのだ。

補償努力は思春期、青年期という自分の人生の課題に取り組まなければならない時期に、結果的に膨大な時間とお金、精神的エネルギーを費やしてしまうことになる。吃音矯正所の門を何度もくぐったというエピソードは私たちには馴染みのものだ。「存在証明のために人生の大半を犠牲にしまいかねないもったいなさ」(20) だと思うのは私だけではないだろう。何よりもこうした努力によって得られるのは、『彼は・・・にしては・・・だ』あるいは『彼女は・・・だが・・・だ』という形式の評価 (21)、たとえば「彼はどもりにしてはよく仕事をする」というような評価に過ぎない。どもるということと仕事ができる、できないということとは本来別次元の問題であるにもかかわらず、「劣っている」というどもりへの意味づけから、常に値引いた形で仕事ぶりが評価されてしまう。仮に周囲がこうした偏見に満ちた思い込みに支配されていなくても、本人自身がこうした負の評価から逃れることはできない、そこから自由になることはできないのである。

どもりを治そうとする補償努力は「あり地獄」への道である。どれだけコントロールできたとしても完璧ということはあるえない。むしろコントロールをすればするほど、さらなるコントロールを目指すことになってしまうのである。彼、彼女は存在証明への無限の努力に駆り立てられるばかりである。

### 比較する—差別という方法

第三の方法は「他者の価値の奪い取り」、つまり「差別」である。他者をおとしめるだけでよいのであるから最も費用対効果がよい方法である。差別によって「この『わたし』の価値が積極的に証明されるわけではない」(22)のだが、その安易さとコストパフォーマンスの高さゆえか、この社会には、何らかの困難や課題、被差別状況下にある人々の中において、さらなる差別が存在していることは私たちのよく知るところである。しかし、私は大阪吃音教室に通いだして約4年になるが、どもる人たちの中において他者を差別することで存在証明をなそうという行為を見たことも、感じたこともない。

大阪吃音教室の例会運営の覚書にある『あなたは全然どもってないじゃないですか』などの発言は、世話人がフォローするというルールは、どもる状態によって悩みの大小を比較するような発言には注意するという意図であると私は理解している。毎回のように初参加の人がいるが、自他のどもる場面やどもり方、悩み方の違いに、新鮮な驚きを感じるという発言や自分以外のどもる人と出会い、話ができたと喜びを感じた、何かほっとした。また、自らは普段使うことのないどもりという言葉が飛び交っていることに不思議な解放感があつたという発言はあつても、「あなたより私の方が流暢だ」とか「私の悩みの方が深刻だ」というような発言は聞いたことがない。おそらくそれはどもる人たちの意識が他者に向かうより、自己の内なる「どもり」に向かう傾向を持っているからだろうと想像する。

伊藤さんがよく紹介するエピソードに、学生時代に友人から「お前と話をしても、聞いてもらっているという感じがしないんだよね」と言われたというものがある(23)。伊藤さんは友人と話をしても、この言葉はどもらずに話せるか、言い換えはできないか、それが無理ならとりあえず話の流れとは関係なくともどもらない言葉を発しようと、目の前の人と対話をしないで、「どもりの壁」と対話していたというのである。映画監督の羽仁進さんは「溝」という表現で同様の発言をしている(24)。このような事例を多くのどもる人の傾向として一般化できるとすれば、どもる人たちは自分の内なる「どもり」と向き合うがために、自他を比較するという傾向から自由であるといえる。「他者の価値の奪い取り」に邁進することはないのではないか。これはどもる人たちの文化であり、美德と理解することができるだろう。

もっとも、「どもりの壁」と対話することは直接的には目の前の相手との対話、コミュニケーションを阻害する要因ではある。しかし、自分の内なる「どもり」をひとつの対話の相手、「他者」と理解するならば、どもる人たちはこの自分の思い通りにできない他者との向き合い方、つき合いを日常生活において試行し、実践してきたともいえる。「人間は、もともと、吃音と共に生きていくことができるように、基本設定されている」(25)という伊藤さんの最近の主張を証明しているのではないだろうか。

### 新たな価値の創造へ

残るひとつ、第四の方法は「価値の取り戻し」、あるいは「解放」である。「社会の支配的な価値を作り替えることによって、これまで否定的に評価されてきた自分の社会的アイデンティティを肯定的なものへと反転させようとする」(26)方法である。支配的な価値体系を作り替え、相対化するわけであるから、支配的文化、価値観に疑問を抱かない人々だけでなく、補償努力を行う、支配的な価値観に依拠する人々との間にも相克をもたらすことになる。この方法を実践する人々の言説が、「水平社宣言」(1922年)や青い芝の会の「行動綱領」(1975年)、「ろう文化宣言」(1995年)のように宣言、綱領といった、その声、主張を他者と社会へと向ける志向性のある種の「激しさ」をもつのはそのためである。

では、「吃音者宣言」(1976年)はどのような価値をとり戻そうというのか。また、何かからの解放を志向しているのか。章を改めて、この宣言に至る経緯から考えていこう。

## **「吃音者宣言」の思想**

### 「吃音者宣言」に至るまで

21歳の伊藤さんは吃音を治したい一心で民間の吃音矯正所である東京正生学院の門をくぐった。しかし、懸命に言語訓練に励んだもののどもりは一向に改善されなかった。それは、伊藤さんだけのことではなく、この時期を共に過ごした300人全員がそうだったのである。「私に残されたのは、『吃音が治らず、改善もされな

った』現実と、多くのどもる人に出会えたこと、そして吃音についての考え方として『恐れがあっても、不安があっても、どもってどんどん話していこう』というアイオワ学派の教え」(27) だったと振り返る。この、自分以外のどもる人との初めての出会い、語り合った経験、ひとつの語りが次々と新たな語りを生み出していった場を経験したことが、おそらく日本だけでなく、世界で初めてとなる、どもる人たちのセルフヘルプ・グループである「言友会」を1965年に創立することへとつながった。

伊藤さんはリーダーとしてグループの企画を練り、交渉を進め、次々と活動を展開する一方で、学資と生活費を稼ぐためにアルバイトに励む生活を送った。アルバイトには独特のルールを設けた。どんなに時給や人間関係がよくても1ヶ月したら辞めて、次のバイト先へと移るというものだ。こうした経験を通して、伊藤さんは吃音で苦勞することはあっても、「どもるからといって、できないことは何もない。どもっていけない場所なんて、どこにもない」との実感を得た。

この実感を確信へと深化、進化させたのが、1975年に35都道府県、38会場で約600人の人々と語り合った、全国吃音巡回相談会である。コールタールの臭いのする電信柱に「どもり・赤面、治します」というビラが貼ってあった時代、左利きを右利きに治したり、弟や妹が生まれて、愛情がそちらに偏ったからというような親子関係の心理的葛藤や軋轢がどもりの原因となる。子どもにどもりを意識させてはいけない、「子どものどもりに無関心をよそおうのが治療なのだ」(28)という育児書がベストセラーだった時代、この程度の情報しかなかった時代に3ヶ月に渡るキャラバンで明らかになったのは、吃音に押しつぶされた人生、そういう物語ばかりが語られるだろうとの予想に反して、セルフヘルプ・グループや十分な情報がないにもかかわらず、吃音とともに豊かに生き、自己と他者、社会への責任を果たしている多くの人々の存在、生きる姿であった。

これに勇気を得た伊藤さんたちは、この出会いをエビデンス(根拠)として、「治す努力の否定」という考え方を主張する。「吃音者宣言」の根本思想は実にこの「治す努力の否定」にある。これは日本吃音矯正会との別名をもつ言友会がセルフヘルプ・グループとしてのあり方と活動の方向性を問い、より深めようとした宣言でもある。治すという補償努力の果てから、反転して現れた新しい価値である。

#### 名乗ることの意味—べてるの家の実践から

自己をどう名付けるか、名乗るか、定義するかということはアイデンティティ操作の核心である。他者や社会から投げつけられる名前を引き受けるのか、拒否するのか。または、新たな名乗りを創造するのか。ここにアイデンティティの政治学が誕生する。

べてるの家の人々による自己病名を名乗るという試みは、その優れた実践である。医者から統合失調症というような病名を告げられ、薬の力で病状を抑えるというそれまでのあり方から、仲間とともに自分の日常生活を困難にしている苦勞のメカニズムやサイクルを研究していく。この過程で医者の目からは病状を示すものでしかない、幻聴や幻覚のもつ意味が変化する。当事者にとっては幻聴や幻覚は生活や人間関係がこじれていくきっかけを教えてくれる知らせであったり、人とつながれずに孤独であった自分を慰めてくれる声であったりする、つまり幻聴、幻覚自体が相談相手であったという発見であった。こうして幻聴、幻覚は「幻聴さん」や「幻覚さん」へと昇格する。もはや当事者は「病人」として医者から単に管理されるだけの存在ではなく、幻聴や幻覚を含む仲間とともに病気のもつ意味を探求する研究者であり、日常生活をやり繰りする生活者、サバイバーなのである。この当事者研究のなかで名乗られるのが自己病名である。ユニークなのはこの自己病名が「統合失調症全力疾走型」や「統合失調症自爆型」というように医学的診断名と当事者からの意味づけとのハイブリットになっていることである。医者のもつ専門知と対等な当事者からの知が立ち上がっている。

べてるの家の人々は他者から名付けられ、分類され、カテゴライズされる存在から、自ら名乗り、アイデンティファイする存在への転換を果たそうとする。それは「苦勞をとり戻す」と表現される、自分の人生の主人公として日常生活を丁寧生きる営みなのである。

このような、べてるの家の実践を補助線として、さらに「吃音者宣言」の中身を検討しよう。

#### 「吃音者宣言」というアイデンティティの立ち上げ方

先に「吃音者宣言」の根本は「治す努力の否定」にあると述べた。それは当事者として「治す努力」がもたらすものが、改善、矯正と「治すことにとらわれ、治そうと努力すればする程悩みを深めた経験」(29)や、い

ま・ここを生きようとしなない「どもっているのはあくまで仮の姿であり、近い将来どもりが治れば、一気に本来の自分をとり戻し、楽しい生活を送ることができる。『どもりさえ治れば』とますますどもりの殻に閉じこもった」(30) 経験、さらには自分への言い訳、甘えである「都合の悪いことが起これば、それを全てどもりのせいにしてきた。あれ程自分を苦しめたどもりが、逃げの人生の中では、自分を守るための隠れ蓑の役割を果たしてしまった」(31) 経験であったことをよく知るからこそ、このような経験の繰り返しや積み重ねの中で、失ったものをよく知るからこそその「治す努力の否定」という到達点なのである。

では、治すことに費やしていたエネルギーをどこに向けるのか。どもる人たちは何に努力するというのか。それは「私たちは、どもりが治った後の人生を夢みるのではなく、どもりを持ったままいかに生きるかを考える一方、このどもりに対する社会通念を変えていくことに取り組みなければならない」(32) という自己と社会の変革である。そのための「第一歩として、私たちはまず自らが吃音者であること、また、どもりを持ったままの生き方を確立することを、社会にも自らにも宣言することを決意した」(33) というのが「吃音者宣言」である。

しかし、「吃音者宣言」は、より正確には「どもり宣言」と言うべきであろう。宣言中に多用されているのは「吃音者」という言葉より、「どもり」である。どもりという言葉を使うことによって宣言文の中で展開されているのは、自己を再定義する、名乗ることをめぐる闘争、アイデンティティの政治学である。文中後半近くまでは、社会通念として存在する「劣ったもの」、「悪いもの」とイメージされたどもりであるが、終盤になって、いろいろな創意工夫をしながらここまで生きてきた、このように「たくましく生き」(34) るものの証としてのどもり、「人に受け入れられないことのつらさを知っている」(35) がゆえに「すべての人びとと連帯していこう」(36) という意志をもつものとしてのどもりという自己規定、自己の再定義である。どもりという言葉のもつ意味が変化しているのだ。自己と社会のもつ通念としてのどもりの意味を転換し、他者とつながるための可能性を秘めたどもりという価値を見出したのである。自分の声を人に届けることの困難さを知るがゆえに、この社会にある声にならない声や小さな声を聞きとることができる、つながることができる社会連帯を希求、志向したのである。言友会の初期の活動は障害者運動とのつながりの中にあつたことは記憶されてよいことだろう。否定すべきものとしてのどもりから、肯定すべきものとしてのどもりへ、吃音肯定の思想はここから始まった。

## 名乗りの政治学

### 名乗りの戦略

伊藤さんは研究論文の整合性や文章の収まりのよさという面から、吃音者という言葉を使うことはあるが、一貫して、どもりという表現を使っている。NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトと「吃音と生きる子どもに同行する教師の会」のメンバーも同様である。どもりという言葉はマスコミが自主規制をしているだけで、決して差別語ではない。その状態を説明するのに吃音より、どもりの方がはるかに伝わる。吃音と聞いても意味のわからない人は多い。むしろ、吃音者という言葉の影には「正音者」という言葉が張り付いているという問題に私たちは敏感でありたい。正音者とは、正しい発音、話し方をする人を指すのであろう。だとすると、どもる人は正しくない話し方や言葉を発する人ということになる。正音者は吃音者の観念の世界に存在するだけなのに、どもりに対して「劣ったもの」、「悪いもの」というメッセージを発してくる。吃音者とは、こうした罠に自ら陥る可能性を持った表現だというのは言い過ぎだろうか。

繰り返すが、どう名乗り、名付けるかはアイデンティティ操作の要なのである。ここで再び、石川准の思考に従って、考察を進めていこう。石川は「名乗りのポリティックス」には3つの戦略があるという。「1 X という名付けに込められた、欠損・無能力・劣位性なども意味の押しつけを拒みつつ、X と名乗る戦略・・・2

X という名付けに込められた、欠損・無能力・劣位性などの意味の押しつけを拒んで、新たに A と名乗る戦略・・・3 X という名付けを拒んで A と名乗ったが、再び X と名乗り、X という名付けに込められた、欠損・無能力・劣位性などの意味の押しつけを拒む戦略」(37) の3つである。名乗るにあたって、その課題を取り巻く時代状況、当事者の認識に応じて3つに類型化されるという考え方で、どの戦略が優れているというものではない。

### 名乗りの3つの類型

日本社会において1の類型の始めに位置するのは「水平社宣言」(1922年)である。部落民自身が差別する側が投げつける「エタ(穢多=穢れ多い)」という言葉の内実を『自由、平等の渴仰者であり、実行者』『階級政策の犠牲者』『産業的殉教者』と規定し、この言葉に込められている価値の転換、取り戻しを宣言した。それゆえに『吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ』と喝破(38)している。いまだに輝きを失わない人権宣言である。

日本の障害者運動に大きな影響を与えた、脳性マヒの当事者団体である「青い芝の会」の5つの運動綱領もこの系譜に属している。全国青い芝の会総連合会の初代会長である横塚晃一は「私達障害者の意識構造は、障害者以外は全て苦しみも悩みもない完全な人間のように錯覚し、健全者を至上目標にするようにできあがっております。つまり健全者は正しくよいものであり、障害者の存在は間違いなのだからたとえ一歩でも健全者に近づきたいというのであります」(39)と自己批判をする。青い芝の会が批判するのは自身の「内なる健全者・健全者幻想」である。この厳しいがリアルな認識に立った上で、綱領は「我らは、自らが脳性マヒ者であることを自覚する」(40)との自己定義から始まる。また、「我らは、健全者文明を否定する」(41)という項目もある。「我々は、・・・運動及び日常生活の中から、我々独自の文化を創り出すことが現代文明の告発に通じることと信じ、且つまた行動する」(42)との高らかな宣言である。

「吃音者宣言」(1976年)も1の系譜にある。どもらない人には人間的な悩みがないかのように「どもりさえ治ればすべてが解決する」(43)と思いつく、自己の内なる「正音者幻想」を批判し、どもりであること、吃音者であることの自覚の上に立ち、「どもりが、どもりとしてそのまま認められる社会の実現こそ、私たちの願い」(44)と謳っている。私はこの宣言と青い芝の会の運動綱領とが同じ論理構造を持っていることに大きな驚きをもつ。フィールドは異なるものの同時代に解放の叫びをあげた屹立した思想性をもつ両者の関連はもっと注目されてよいだろう。

2の例として、昨年、夏の鹿児島での「第2回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」の講師である多文化間臨床心理学、グループワークを専門とする、九州大学留学生センター准教授(臨床心理士)の高松里さんの話から考えよう。高松さんはかつては「色盲」と呼ばれた、ものの見え方に課題のある人である。2003年度から学校の身体検査の項目からは除外されたが、進学や就職に関する差別や、遺伝性の課題であるため、結婚差別も存在した時代に学生生活を送った高松さんは、この自分の課題を的確に表す言葉がないこと、それゆえに他者に体験として語るができないことに悩んだ経験を持っていた。色が見えないわけではないので「色盲」は納得できない。色が弱いわけではないので「色弱」はおかしい。第一、「色強」という言葉はない。「色神」は意味不明だ。現在、一般的に使われている「色覚異常」、「色覚障害」は異常者と言われているようで受け入れられない。また、障害は社会的に構成されるのであるから、個人モデルに傾いたこの表現も受け入れられない。高松さんがたどり着いたのは「色覚マイノリティ」(45)という自己命名である。このオリジナルの命名は高松さん以外には一般化してはいないが、この名前を通して高松さんは自分の問題を語れるようになった、他者と共有できるようになったと語ってくれた。石川が提示する2の優れた実践であろう。

この新たに名乗るといふ戦略をよく使っているのが発達障害の領域である。「自閉症は、知的障害から分岐してできた概念」(46)であることは押さえておくべきことだろう。カナリー型の自閉症から高機能自閉症やアスペルガー症候群が「発見」され、さらにはアメリカ精神医学会の診断基準の改訂に伴い、自閉症スペクトラム障害へと変更される背景には社会と医学からの要請だけではなく、当事者団体、特に親からの働きかけを見ることができよう(47)。

また、在日韓国・朝鮮人の中には、「在日」というところにアクセントを置いて、自己規定をする人、在日コリアンやダブルと表現する人たちの存在があるが、これも新たな名乗りの実践である。

3の実践は「ろう文化宣言」(1995年)である。「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」(48)と自己を再定義する、ろう者の運動である。彼ら、彼女ら、「かつて『聾者』と呼ばれた人々は、いったん『聴覚障害者』と名乗るかえしたのち、再び『ろう者』(仮名になっていることに注意してほしい)を名乗るようになっていく」(49)。再び、名乗ることになる「ろう」という言葉は「聾」に込められた「医学的な障害概念ではない。そうではなく、言語・文化的概念」(50)として選び直された言葉、名前としての「ろう」という主張である。

いずれの類型もゲーゲンがアイデンティティの政治学としてあげている、支配的言説への「抵抗」と「自己定義の試み」、その結果、自己言及的に構成される当事者の本質という「ポリティカル・リコンストラクション（政治的再構成）」(51)の3つの特徴を示している。

#### さまざまな私のあり方へ（とりあえずの結びとして）

ヘーゲルは「精神現象学」の中で「承認をめぐる生死を賭けた闘争」というテーマを展開している。ヘーゲルによれば「私は私である」ということを他者に認めさせる欲望ゲームが人間関係の原型である。自己アイデンティティが他者の承認をその要件としているとするならば、この「承認をめぐる生死を賭けた闘争」は「アイデンティティをめぐる生死を賭けた闘争」と言い換えることができるだろう。そう、私たちは自己の存在証明に必死になる生き物なのだ。認知症になることが本人はもとより、家族にとって少なからぬ動揺を与えるのは、過去から現在、未来へとつながる本人の意識や記憶が曖昧となり、家族と紡いできた語り、物語がそれとして了解されなくなってくるから、つまりアイデンティティの危機に直面していくからなのであろう。

ところで、石川は1、2、3のようにアイデンティティを立ち上げる方法を本質主義と呼び、「アイデンティティを立ち上げずに、ポジションを自覚する立場」(52)がありうるとして、この方法を脱構築と整理している。1の場合ならば、「Xという名付けられた人のあり方を積極的に肯定し、それを誇りとする。＝Xという肯定的アイデンティティを立ち上げ、Xというポジションを引き受ける」(53)のが本質主義である。この小論のここまでの記述は本質主義の立場からのものである。一方、脱構築は「Xに込められた否定を拒絶する身振りとしてXと名乗るが、Xであることを誇りとはしない。＝Xというアイデンティティは立ち上げずに、Xというポジションを引き受ける。当事者性を引き受けるためにXを名乗る」(54)という方法である。そして、石川自身は本質主義的な方法よりも、脱構築的なあり方に魅力を感じることを表明している。

アイデンティティ操作の第四の方法は「解放」であった。このことがアイデンティティからの解放、自由をも意味するとすれば、次の課題は脱構築的なあり方を明らかにすることである。石川はべてるの家の実践にそれを見ているが、私は大阪吃音教室が紡いできた、「吃音受容」、「どもる事実を認める」、「吃音とつき合う」、「吃音肯定」、「吃音サバイバル」等の言説の変遷、その意味するところをナラティブ・アプローチによって明らかにすることによって可能になると考えている。

(続く)

**追記** (今後の課題について備忘録として記しておきたい)

- 1) 障害の「社会モデル」を提示する「障害学」の観点からの吃音についての考察。
- 2) タルコット・パーソンズの医療社会学、病人役割論の観点から逆に見えてくるセルフヘルプ・グループのもつ性格、アイデンティティについての考察。
- 3) どもる人たちの世界を描き出すための方法論として「ナラティブ・アプローチ」が有効であることについての考察。ここまでが理論編となる。
- 4) 本論として、「大阪吃音教室」や「吃音親子サマーキャンプ」等の場で何が経験され、どのような言説が紡がれているのか。アーサー・フランクの3つの「病いの語り」(55)を補助線にして「共同体の物語」を描き出すこと。

#### 〈注〉

- (1) 上岡陽江・大嶋栄子 2010 「その後の不自由」 医学書院 p113
- (2) この日の例会の様子は 大野裕・伊藤伸二 2011 「ストレスや苦手とつきあうための認知療法・認知行動療法」 金子書房で紹介されている。
- (3) 向谷地生良・伊藤伸二 2013 「吃音の当事者研究」 金子書房 p179 にこの表現を見ることができる。
- (4) W.ジョンソン・D.メラー編/田口恒夫訳 1967 (1974) 「教室の言語障害児」 日本文化科学社 p6
- (5) (6) (7) (8) W.ジョンソン・D.メラー編 1967p7
- (9) (10) チャールズ・ヴェン・ライパー他/内須川洗・大橋佳子・伊藤伸二訳・編 1975 「人間とコミュニケーション」 日本放送出版協会 p41
- (11) 大野裕・伊藤伸二 2011p155
- (12) S.J.ウォーリン・S.ウォーリン/奥野光・小森康永訳 1993 (2002) 「サバイバーと心の回復力」 金剛出版 p13
- (13) 現在、静岡県立大学国際関係学部教授。2003年に設立された障害学会の初代会長である。社会学者として逸脱論や差別論、アイデンティティ

ィ・ポリチックス論などを専門とする。一方で、16歳の時に網膜剥離で失明した石川は支援工学分野での論文も多数あり、ソフトウェア開発も行うプログラマーでもある。

- (14) 石川准 1992「アイデンティティ・ゲーム」新評論 p23～p33 石川准『障害、テクノロジー、アイデンティティ』石川准・長瀬修編・著 1999「障害学への招待」明石書店所収 p48～p54
- (15) 石川准 1992p23
- (16) アーヴィング・ゴッフマン/石黒毅訳 1963 (2001)「スティグマの社会学」せりか書房 p81
- (17) 神谷勝『酒屋のおっちゃん和我』NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト編集 2006「吃音を生きる」所収 p3
- (18) 石川准 1992 p 28
- (19) カナダ・北米の最新の吃音治療の現状については、オンタリオ州立リハビリテーションセンターで言語聴覚士として働いた経験のある池上久美子さんと伊藤さんとの対談が詳しい。日本吃音臨床研究会編集「スタタリング・ナウ」(2012.6.20 No.214 2012.7.22 No.215)
- (20) 石川准 1992p32
- (21) 石川准 1999p49
- (22) 石川准 1999p50
- (23) たとえば、日本吃音臨床研究会編集「スタタリング・ナウ」(2004.5.18 No.117) p1
- (24) 日本吃音臨床研究会編集「スタタリング・ナウ」(2003.3.21 No.103) p4
- (25) 日本吃音臨床研究会編集「スタタリング・ナウ」(2014.4.21 No.236) p1
- (26) 石川准 1999p51
- (27) 日本吃音臨床研究会編集「スタタリング・ナウ」(2008.1.19 No.161) p3
- (28) 松田道雄 1999「[定本]育児の百科」岩波書店 p600 「どもり」についてこのような記述のある松田の「育児の百科」は 1967 年に出版され、その後 1980 年に新版、1987 年に最新版、1999 年に定本として 3 度の改訂を経た累計 160 万部に及ぶ育児書の大ベストセラーである。現在、定本版は品切れとなっているが、「子どもの病気」の項目を省いたうえで、2007 年から 2009 年にかけて 3 分冊に装いを改め、岩波文庫という形で出版されている。
- (29) (30) (31) 伊藤伸二編 1976「吃音者宣言」たいまつ社 p13
- (32) 伊藤伸二編 1976p14
- (33) (34) (35) (36) 伊藤伸二編 1976p3
- (37) 石川准 2004「見えないものと見えるもの」医学書院 p246～p247
- (38) 大阪私立学校人権教育研究会 2009「新任教員用『人権』ハンドブック まなび」p37 この部分を含む「部落問題」の項目は坂本が担当、執筆した。引用文中の『 』の部分は水平社宣言からの引用である。
- (39) 横塚晃一 2010 (第 2 版)「母よ！殺すな」生活書院 p64 (1981「増補版 母よ！殺すな」すずさわ書店)
- (40) (41) (42)「日本脳性マヒ者協会 全国青い芝の会」のホームページより <http://w01.tp1.jp/~a151770011/index.html>
- (43) 伊藤伸二編 1976p2
- (44) 伊藤伸二編 1976p14
- (45) 高松里 2013「自分らしい臨床を行うための『当事者研究』入門」(レジュメ) (第 2 回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会〈記念講演〉)
- (46) 高岡健 2007「やさしい発達障害論」批評社 p30 他に、高岡健 2007「自閉症論の原点」雲母書房
- (47) 当事者、親の意図するところについては興味深い論点ではあるが、この場では考察しない。
- (48) 木村晴美・市田泰弘 1995「ろう文化宣言」現代思想編集部編 2000「ろう文化」青土社所収 p8
- (49) 石川准 2004p249
- (50) 森社也『ろう文化と障害、障害者』石川准・長瀬修編・著 1999 所収 p160
- (51) ケネス・J・ガーゲン/東村知子 1999 (2004)「あなたへの社会構成主義」ナカニシヤ出版 p65～p69
- (52) 石川准 2004p249
- (53) (54) 石川准 2004p246～p247
- (55) アーサー・W・フランク/鈴木智之 1995 (2002)「傷ついた物語の語り手」ゆみる出版